

# 動物飼育が生命尊重の心育む

子どもの健やかな成長を促す動物飼育体験や生命尊重の心を育む環境づくりなどを推進する全国学校動物飼育研究会(会長 宮下英雄・聖徳大学教授)は7月19日、都内で第9回全国研究大会を開催した。参加者は300人。新学習指導要領(生活科)では、児童の動物や植物へのかわりが一層深まるよう「継続的な飼育、栽培を行う」ことが明示された。さらに飼育活動を継続的に行う重要性や、それに対する成果と課題などの発表報告があった。

## 全国学校動物飼育研究会が全国大会

□頭発表では、小椋孝 その死に出くわすという史・岩手県花巻市立矢沢小学校教諭が「愛情をもった飼育にあたる子どもたちを見て考えたこと」というテーマで発表した。同校では4年生の全児童が飼育委員会に所属し、委員として飼育活動をするのが大きな特徴。この発表では、小椋教諭が平成18年度に担当した当時の4年のクラスの飼育活動を基に、他集団と比べて、飼育活動の取り組みにどのような違いがあったかを報告した。

も当番の子以外の児童が同じ質問項目を使って比較したデータも報告。ウサギの飼育などを合わせ、2年間の飼育体験を通して「世の中のいろいろな出来事に関心がある」「新聞やテレビのニュースに関心がある」では、同じ学年の他のクラスと5割以上の差があった。

## 小学校 実践

### 問題解決を図る児童も

驚見・筑波大附属小教諭が報告

教室内でモルモットなどは、「教室で飼う動物の数にも意味がある」とし、1匹の時は、「休みの時に児童の家で世話をする回数が減り、一つしかない命をみながら感じてほしいから」と話した。

教室で飼育の良さについて、モルモットを通して人とつながりができることなどを報告した。例えば、まったくモルモットに触れることができなかった1年生に対して、2年生が無理をせず、その子のひざにタオルを敷いて直接触れないように問題解決を図る場面など。驚見教諭は「こうした体験活動から、子どもは相手のことを考えることができるようになる」と話した。

### 継続的な飼育が必要

中川事務局局長講演

事務局局長の中川美穂子氏は、東京都獣医師会が2005年度に東京・葛飾区の27小学校を対象に行った動物飼育調査を基に、学校飼育に関する課題と対応について講演。子どもたちが良い動物飼育体験をするために、「継続的な飼育が必要」と指摘し、「専門的な知

## 情報と体験の交流を

冒頭の講演で、鳩貝太郎・国立教育政策研究所総括研究官は「自然体験や動物飼育体験が子どもの生命尊重の心や態度を育成する」と指摘した。また、学年が上がるにつれ、理科の「生き物の成長や体のつくりと動き」などで多くの学びが言葉が増えることから、「教科書や図鑑などで得られる2次情報と動物などに触れ合う直接体験が相互交流することで、より確かな概念形成を図ることができると述べた。

## 生命を気遣う当番活動を報告

小椋・岩手県花巻市立矢沢小教諭

「プラウンの分までニワトリをかわいがってあげよう」。これを合言葉に当番活動を行った子どもたち。このクラスは、3年生の時に「プラウン」という名のバスツレラ病にかかったウサギを飼育し、4年生になる直前に



学校での生命尊重の指導の課題を話す鳩貝・国立教育政策研究所総括研究官



モルモットの抱き方を1年生に教える2年生

モルモットの抱き方を1年生に教える2年生

識を持った地域の獣医師と保護者と連携することが大切」と話した。こうした支援システムを構築するために、「校長などの管理職がリーダーシップをうまく発揮してほしい」とした。

事務局 ☎0422・5067066 (http://www.veis.ne.jp/school/pets/silkukenkkyu2.htm)